

# News & Scope Handai Hospital

阪大病院ニュース

第15号

発行 / 大阪大学医学部附属病院広報委員会 (総務課)  
http://www.hosp.med.osaka-u.ac.jp

禁転載 (この紙面は再生紙を使っています)

住所 / 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-15 TEL / 06-6879-5016

## 栄養マネジメント部発足

食事をするのでできない患者さまや、食事を制限しなければならない患者さまの栄養指導、管理を阪大病院としてトータルに行う栄養マネジメント部が設立されました。

### 専門チームが給食、栄養管理

阪大病院には先天的な病気や手術によって食物が消化、吸収できない患者さまが年間約250人入院しています。これらの患者さまは静脈から栄養を入れる中心静脈栄養(IVH)や直接、腸に栄養を入れる経腸栄養という方法で栄養をとっています。また、在宅療

養で同様に栄養をとっておられる患者さまが約50人います。これまで、IVHなどの栄養管理システムは、日本の指導的立場にある小児外科グループが、各診療科からの依頼を受けて、管理、指導を行ってきました。栄養管理チームは小児外科単独で、看護師

や薬剤師、管理栄養士などの協力を得て、維持してきました。しかし、静脈・経腸栄養ともに、さまざまな合併症の起こる可能性があるので、スタッフが患者さまの急変に即座に対応できるように、病院としてのリスクマネジメントの観点からも、専門のチームによ

る中央管理システムが望まれていました。また、糖尿病や慢性腎不全などの患者さま

への食事療法や食事制限の指導は、各担当の診療科からの依頼で、管理栄養士が個別、または集団に対して指導、管理を行ってきました。しかし、この指導法では、患者さま

個々の栄養状態を医学的、栄養学的に分析、その結果に基づいて栄養管理や指導が行われているとは言えない場合もありました。

養管理や指導が行われることについては、より安全で質の高い栄養管理を

さらに、入院患者さまへの給食について、栄養管理は管理栄養士に一任されています。栄養管理と指導は患者さまにとっての重要な治療の一環であり、専門家による高度な栄養管理システムにすることによって、より安全で質の高い栄養管

### 病院全体で安全、質の高い指導

さらに、入院患者さまへの給食について、栄養管理は管理栄養士に一任されています。

同部は栄養管理に詳しい、医師、管理栄養士、看護師と薬剤師の計16人で構成され、小児外科の福澤正洋教授が部長を務めています。そして、栄養給食管理部門、栄養代謝制御部門、栄養サポート

は、給食に関する栄養管理、および入院患者さまの栄養相談、栄養代謝部門は糖尿病、肥満、腎不全などの患者さまの栄養指導と管理。そして、栄養サポート部門はIVHや経腸栄養の管理となりま

す。さらに、各部門とも単に栄養管理をするだけでなく、必要十分な栄養が吸収されているかどうかを評価したり、治療効果を評価したりし、さらによりよい給食、栄養管理が行える基礎資料としていきます。

福澤部長は「適切な栄養治療、指導が病院全体として行われるようになり、治療効果の向上、合併症の予防、患者さまのQOLの改善が図れます」と話しています。



栄養サポートチームの回診 中央右「福澤正洋教授」

## 遺伝子診療部設立

### 心理的、社会的にサポート

ヒトゲノムが解読され、病気と遺伝子の関係が明らかになってきました。阪大病院では、患者さまの遺伝子にかかわる病気についてのカウンセリングを行う遺伝子診療部を設置しました。病気と遺伝子の関係はさまざまです。たっ



患者さまや家族(手前)に対して行われる医師、臨床心理士、看護師らによる遺伝子カウンセリング(未来医療センターで)

た一つの遺伝子の異常で発症する筋ジストロフィーやハンチントン病などの遺伝病がありますし、糖尿病や高血圧、がんなどの生活習慣病は複数の遺伝子がかかわったうえに、環境因子も大きく影響しています。遺伝子研究の成果に

よって、病気に関係する多くの遺伝子が解明されつつあり、血液を採取してさまざまな遺伝子を調べることができるようになりました。阪大病院ではこれまで、ダウン症や筋ジストロフィー、家族性のがんなど遺伝病の遺伝相談を各診療科で行ってききました。遺伝相談には医学的な専門知識だけでなく、心理面、社会的なサポート体制など幅広い知識が必要とされるうえに、プライバシーや遺伝情報の保護など倫理面でも厳しい対応が求められます。また、遺伝子研究や遺伝子治療など新たな医療問題への対応も必要になってきました。

開設された遺伝子診療部はすべて予約制になっています。相談があれば、臨床遺伝専門

部は、給食に関する栄養管理、および入院患者さまの栄養相談、栄養代謝部門は糖尿病、肥満、腎不全などの患者さまの栄養指導と管理。そして、栄養サポート部門はIVHや経腸栄養の管理となりま

さらに、各部門とも単に栄養管理をするだけでなく、必要十分な栄養が吸収されているかどうかを評価したり、治療効果を評価したりし、さらによりよい給食、栄養管理が行える基礎資料としていきます。

予約制でカウンセリング

阪大病院ではこれまで、ダウン症や筋ジストロフィー、家族性のがんなど遺伝病の遺伝相談を各診療科で行ってききました。遺伝相談には医学的な専門知識だけでなく、心理面、社会的なサポート体制など幅広い知識が必要とされるうえに、プライバシーや遺伝情報の保護など倫理面でも厳しい対応が求められます。また、遺伝子研究や遺伝子治療など新たな医療問題への対応も必要になってきました。

開設された遺伝子診療部はすべて予約制になっています。相談があれば、臨床遺伝専門

さらに、各部門とも単に栄養管理をするだけでなく、必要十分な栄養が吸収されているかどうかを評価したり、治療効果を評価したりし、さらによりよい給食、栄養管理が行える基礎資料としていきます。

### 院内感染について(おわび)

去る6月29日(火)に報道公表いたしました本院での多剤耐性緑膿菌(MDRP)の院内感染について、本院の患者さまはじめご関係の方々にご心配、ご迷惑をおかけしたこと、深くおわび申し上げます。

院内特別調査委員会および外部調査委員会を設置して、客観的検討・検証を依頼するとともに、複数感染の要因分析と感染拡大・再発防止のための改善点を指導いただくことになって

おります。

なお、5月下旬から多剤耐性緑膿菌が複数の患者さまから検出されましたが、6月16日以後新たな検出はなく、今回の院内感染は終息しております。今後感染予防策の確立に全力をあげ、院内感染防止に努めてまいりますので、ご理解いただきますようお願いいたします。

大阪大学医学部附属病院  
病院長 荻原 俊男

医、相談をされる患者さまの疾患の専門医、看護師と臨床心理士が同席して、相談を行います。一人の患者さまに約1時間かけてお話を伺います。保険は適用されませんが、自費診療になります。

患者さまのプライバシーを守るために、各科共通のカルテとは別に遺伝子診療部のカルテを作成し、遺伝子に関する情報は担当医しか見ることができないシステムにしています。

遺伝病の相談だけでなく、近親者に関心や生活習慣病が多いので心配な人や、遺伝子治療についての相談など遺伝子に関する相談ならなんでも受け付けます。

戸田達史部長は「遺伝病については、医学的なサポートだけでなく、心理的、社会的なサポートも必要で、遺伝子診療部の開設によって質の高い遺伝相談が行えるようになり、また、今後の課題ですが、糖尿病や高血圧、がんなどの関連遺伝子がますます見つかるにつれてリスクファクターを減らす予防に結びつけることもできます」と話しています。

遺伝子診療部の外来は火、金曜日の午後1時～4時。予約電話は06-6879-6558。



### 慢性副鼻腔炎治療でパス大会

耳鼻咽喉科の内視鏡による慢性副鼻腔炎（蓄膿）治療のクリニカルパスを検討する第2回阪大病院パス大会が6月1日に行われました。同科では、これまでの日程表のようなパスに加え、患者さまの日々の状態などを記録するパスの日めくり用を作成するとともに、パスに関して気付いたことを書くパスノートを取り入れました。その結果、パスが病棟全体で共有できるようになり、パス運用中に問題点がわかるようになりました。

大会では、薬剤部や感染制御部から術後の抗生物質の投与状況や方針について報告やアドバイスがなされました。また、多剤耐性菌を増やさないためにも適切な抗生物質の使い方が重要であることが指摘されました。

### リスクマネジャー研修に190人

平成16年度国公立大学附属病院リスクマネジャー研修が5月26～28日の3日間、文部科学省及び大阪大学の主催のもと、大阪大学のコンベンションセンターで行われました。

大学病院の医療の安全と質の向上を目指して、文部科学省などが毎年行っており、全国70の大学から医師、看護師、薬剤師、事務職員など190人が参加しました。

東大病院の永井良三病院長の講演に続いて、専任リスクマネジャー5人によるパネル討論などが行われました。

### 願い込め七夕コンサート

恒例の七夕コンサートが7月7日、病院エントランスホールで開かれました＝写真。

患者さまによって「早く治りますように」などの願い事が書かれた短冊が、病院ボランティアさんと職員の手によって、高さ5mのササ2本に飾られ、ホールに設置されました。

コンサートは看護部と薬剤部の有志が「きらきら星」「Bon Voyage」などを演奏したり、歌ったりしました。「世界に一つだけの花」はベッドに横になったままや車イスの患者さま、職員もいっしょに歌うなど、楽しい七夕の夕べを過ごしました。



### 阪大病院が良い病院ランキング5位に

日経ビジネス、日経メディカル共同調査による「良い病院 総合ランキング ベスト20」で大阪大学医学部附属病院が5位（国立大学病院では1位）にランキングされました。この調査は、医師が治療の実力を認め、患者の満足度が高く、運営体制が整っている、の異なる3つの視点から関東・東海・近畿の有力病院を評価し、総合的に「良い病院」ランキングを作成したもので、7月5日号の日経ビジネスに掲載されました。



**Q** 現在受診している診療科以外を受診するにはどうすればよいのですか？

**A** 主治医より他科を紹介されて受診する。他院の紹介状により受診する。本人の希望により別の診療科を受診する。などがあります。と については、診療の内容、検査の結果や経過などの情報が適切に先方の医師に伝わるので、スムーズに診療が進みますし、互いの診療科が連携して相互的に治療が行われます。一方、の場合、希望する診療科があれば、再来窓口を通じて受診することができますが、具体的にどの診療科を受診すればよいかわからないこともあります。その際には、総合診療外来で医師による受診相談を受けていただき、適切な診療科を案内しています。専門的に診療科がいくつかに分かれている内科や外科などの受診を希望する場合にも、まずは総合診療外来で医師にご相談ください。

### 造血器腫瘍治療の造血幹細胞移植

# HLA不適合移植 8割に患者さまに優しい「ミニ移植」も



患者さまの状態に合わせた白血病治療を行う阪大病院＝無菌室での治療

**血液・腫瘍内科**  
阪大病院の血液・腫瘍内科では、年間約50例の造血幹細胞移植を行っています。造血幹細胞移植には、ドナーの骨髄から造血幹細胞を取り出して移植する骨髄移植、末梢の血液から造血幹細胞を集めて移植する末梢血幹細胞移植、赤ちゃんのへその緒にある造血幹細胞を移植する臍帯血移植があります。

最近では、末梢血幹細胞移植が多くなり、HLA不適合の移植が8割を占めるまでになっています。また、骨髄バンクのドナーから

移植する末梢血幹細胞移植、赤ちゃんのへその緒にある造血幹細胞を移植する臍帯血移植があります。最近では、末梢血幹細胞移植が多くなり、HLA不適合の移植が8割を占めるまでになっています。また、骨髄バンクのドナーから

の移植も増えていますが、HLA不適合でも移植ができるため、移植の可能性が高くなり、関西だけでなく、関東、九州、中国地方からも患者さまが治療にいられます。

### 臨床検査部 待ち時間できるだけ短く 外来採血室を拡充

臨床検査部の外来採血室を拡充するとともに、今年4月から受付時間を延長して、患者さまの便を図り、待ち時間をできるだけ短くする努力をしています。

採血室には一日平均600人の外来患者さまが来られ、採血の検査

「ミニ移植」は患者さまの体に優しい方法です。高年齢や合併症のある患者さまにも移植が行えるようになり、現在、阪大病院では、従来の移植より「ミニ移植」の方が多くなっています。同科の金倉謙教授は「移植にもさまざまな選択肢ができてきたので、患者さまの状態に合わせた治療ができます」と話しています。



柴田政彦先生（中央奥）を囲んで緩和ケアチームのカンファレンス

### がん末期患者さまを支援

がんの末期には、身体的な痛みや死への恐怖など精神的な苦痛を和らげる緩和ケアが重要になってきます。阪大病院では、今年4月から緩和ケアをサポートするチームを

「緩和ケア」チーム結成  
また、余命が少なくなった患者さまの精神的サポートも主治医や病棟の看護師では対応できないこともあり、

がん末期の患者さまの入院されているがん末期患者さまの苦痛改善が難しいときに、主治医からの依頼によって、週1回、チームで検討会を開き、どのように対応するかを決めます。そして、実際に患者さまのベッドサイドに行き、モルヒネの投与量や投与方法を変えたり、患者さまの話をじっくり聴くなどして、苦痛を和らげる努力をします。

また、受付時間をこれまでの午後2時半を午後4時までとし、早朝空腹時の採血でない

保健医療福祉ネットワーク  
在宅支援 活発に  
保健医療福祉ネットワークは、在宅支援の場を拡大し、在宅医療を望む患者さまについて、依頼があれば、家族の自宅での十分なサポート体制があるか、訪問診療や訪問看護が必要かどうか、介護保険など、福祉サービスの導入が必要かどうか、などを調べる。それらの条件を整えれば、患者さま、家族、主治医と在宅療養の際にサポートしていただける方々と検討会

をもちます。そして、あらゆる問題点を話し合っ、解決可能であれば、在宅へ移行することができま。在宅へ移られてからも、フォローをして患者さまのQOL（生活の質）を確保されているのかを確認しています。同部の支援により、在宅へ移行された患者さまは、一昨年は74人でしたが、昨年は185人に増えました。